

英語の性差別語と日本語人⁽¹⁾への影響

—英語教科書の調査と共に—

佐々木 恵 理

1. はじめに

日本語は英語と密接な関係を保ちながら、常に新しいことばが生み出されている。そうして生み出されたカタカナ英語（エイゴ）は、日本語でありながら英語のもつ概念をも内包する中間的な存在である。日本語の中の性差別語について論議する際には、この氾濫するエイゴをどのように取り扱うのかという問題が生じてくる。つまり、日本語における性差別語の言語改革は、エイゴの性差別語の明確な位置づけとその回避をも含む方向性を合わせもつものでなければならないであろう。

日本において英語の普及に努めているのは、テレビを初めとするメディアであり、その外堀は、英会話学校、各種英語検定試験、語学留学といった教育産業で固められている。だがその中核を成しているのは、文部省が奨励する英語教育に他ならない。そして、学校教育の中で使用される検定教科書は、日本語人の多くが初めて「正式に」英語に触れる際の模範となるものである。教科書は国家が承認する最も信頼性の高い「正統な」英語のマスメディアとして機能している。

教科書に示された内容は、学習者にはまさにお手本であり、誤った記述でさえ真実となって、学習者の物の見方を支配することも可能である。一般に、この視点からの教科書問題としては、社会科教科書の歴史の記述を巡る「家永裁判」が広く認知されている。しかしながらその一方で、性差別的記述の誤りは問題とは見なされにくく、実際、性別役割分業や男性中心主義的な構成は温存されたままである。⁽²⁾

本稿は、支配的な英語のイデオロギーには言語の政治的公正さを、またことばのもつ家父長主義的男性優位思想にはフェミニズムをもって異議を唱え

ようとするものである。そのためには、まず英語という言葉と日本語人との関わりを概観する必要がある。

2. 何故英語なのか

英語は、現時点で国際社会での共通使用言語として、また多言語（多民族）国家での公用語として「有効」な言語である。ここでは英語が多くの国で使用されているという地理的な広がりのみをその理由とし、英語人の侵略、統治、植民地化による言語支配の結果であるという経緯は無視されるのが常である。世界の共通語であるというこの認識が、英語を他の言語より優秀で、付加価値が高いという論理のすりかえを可能にしているのである。ことばのもつ政治的支配力の脅威について、様々なレベルで議論、警戒されている今日^③でも、この英語優位思想は未だ効力を失っていない。

脱亜入欧や舶来志向ということばに代表されるように、日本は明治維新以降、白人至上主義のイデオロギーを吸収し、また特に戦後は合衆国からの強い影響を受けながら、独自の文化を形成してきた^④。その結果、「外国」が合衆国や欧州であるように、また「ガイジン」が白人を指すように、現代の多くの日本語人には、「外国」で「ガイジン」が使う英語習得が国際化につながるという短絡的で浅薄な意識しかないのが現状である。

こうした西洋・白人・英語の三大至上主義は、日本語人の意識の底流に潜んでアイデンティティを形成している。そしてこの意識は「バイリンガル」が英語に代表される「横文字」言語との二言語使用者を、「帰国子女」がその文化圏から帰国した人を指すことばの意味に端的に表れている。一般に、朝鮮語やタガログ語との二言語使用者やイランやキューバから帰国した人がこのような意味でイメージされることはまずあり得ない。つまり、「バイリンガル」や「帰国子女」は、「外国」や「ガイジン」を指向する賞賛のことばなのであり、一方ではそれ以外の外国（人）を暗に下位区分する働きをしていることが分かる。

津田幸男は、民族差別、性差別に加えて「言語差別」をも差別の射程に入れるべきだと主張する^⑤。日本では極端なまでの英語信仰により、英語ができ

る者は過度のエリート意識をもち、「横文字」混じりの日本語を使うことによって英語ができない者を抑圧、排斥するといった権力を誇示できる。すなわち、英語ができないことは、単にある言語を習得していないということを超えて、個人の能力、人格、立場までも政治的な劣位に置かれてしまうことを意味しているのである。これはJ. E. スタッキーが力説するところの、識字そのものが及ぼす抑圧、支配、優越性に等しい⁶⁾。このような中で日本語人は、英語、バイリンガル、そして「国際人」への羨望と、そこに到達できないことへのコンプレックスや、到達した（ように見える）人への嫉妬という二律背反に捕らわれて、屈折したアイデンティティを抱えることになる。それと同時に、言語には絶対的な優劣があるというような歪んだ見方をも身につけてしまうのである。

歴史的に外国文化を取り入れることを得意とする日本語人は、英語のもつ強いイデオロギーと影響力に抗うことなく、無防備にそして嬉々として英語を受け入れている。そして日々、英語はカタカナ英語として日本語に過剰に取り込まれているのである。現代日本語のあり方のみに焦点を当てれば、この状態は単なる言語的な変遷の一部に過ぎないかもしれない。しかしながら、現代に生きる私たちは、日本語（人）を構造的に支配している「氾濫するエイゴ」と共存してゆかなければならないのは確かなのである。

次章から、高等学校外国語科用教科書「英語ライティング」⁷⁾の調査結果を踏まえて、英語の性差別語から日本語（人）が受ける心理的、言語的影響をman（マン）を中心に論じてゆく。なお、使用教科書とその正式名称などは表1に、性差別語とMsの抽出結果は表2に示した。また本論の英語と日本語の性差別語および回避語は、原則として教科書からの抽出、引用である。

3. man を取り巻くイデオロギーの浸透

日本語には、「男」ということばが「人間」を直接指し示すイメージの移行がない。それでは英語を学ぶ日本語人は、「man＝人間」という違和感をもどのように克服し、その歪みを取り入れてゆくのであろうか。

まず、学習者はこれを英語のもつ独特の概念だと解釈する。man を「人

間」と理解することは、日本語への訳出に影響するだけではなく、「無冠詞単数」という文法を理解することなので、重要事項として暗記してゆくことになる。次に、日本語にはない「man＝人間」という特殊性を理解し得たという自負心がそこに生まれる。先述したように、英語が理解できるということは価値の高いことなので、単語でも文法でも、複雑で特異なものを習得すればするほど、この自負心は強くなる。これによって、manned（有人の）、man-made（人工の）などの語も、a man of letters [character]（文学者〔人格者〕）、the last man（最も～ない人）、a wise man（賢者）などの定型句も man の概念の特殊性ゆえだと再認識することになる。こうしてことばを習得してゆく中で、人間を男で代表させることに対する疑問は意識下に押さえ込まれてゆく。いわば、「man＝人間」は無条件に暗記すべき公式であり、応用問題を解いてゆく基礎知識なのである。

ここで重要なのは、この学習の過程を通して、男子学習者は英語のもつ言語的な「男性の優位性」にひそかに満足し、他方女子学習者は「女性の排除」をそのまま容認してゆく点なのである。そして、この男性優位のイデオロギーは日本の男尊女卑のイデオロギーと呼応しながら、日本語人のアイデンティティを支配してゆく。繰り返される学習によって、いつしか man の使用に対する不可解さは忘れ去られ、そのイデオロギーが機械的に刷り込まれる仕組みである。なぜなら、論理的な歪みをもつ「man＝人間」の公式証明が学習の場で解説されること、つまり男性優位イデオロギーが暴露されることは極めて少なく、再度疑念を抱く余地を与えないからである。これは学習者が受験システムに組み込まれるほど強化されることになる。

こうして一旦「man＝人間」のイデオロギーの刷り込みが成功すると、日本語人でさえ、それに抵抗しようとするイデオロギーに反発を抱くようになる。繰り返すが、日本語人にとって、英語はレベルの高い言語であり、有益であり、その文化は理想である。また、英語習得はその人の自負心や優越感を生み出し、そしてアイデンティティを形成している。そこでは「man＝人間」の放つ男性優位性でさえ、誉むべきことなのである。そうであれば、human beings を用いるような男性優位を薄めるイデオロギーに対して強い拒

絶反応を起こすのも不可解なことではない。なぜならこうした感情的反発は、自らのアイデンティティの崩壊の危機を察知する自己防衛のひとつであり、男性のもつ既得権を奪われることへの恐れと表裏一体を成しているからである。

教科書作成の過程では、「man＝人間」への対抗イデオロギーに対する反発は、全体としては次のような複雑な現象として表されている。man について検定意見のついた教科書編集者は「man が不適切と判断した基準を明確にして欲しい」、「母国でさえ未解決の問題について、文部省が一律に指導するのは問題」⁽⁸⁾と内面を吐露し、不満を述べていることが報告されている。これを見ると、あたかも検定で man が完全に回避されたかのような印象を受けるが、調査結果からみると、未だ18冊の教科書では man が採用され、内15冊は他の箇所でも human beings などの回避も試みるという混乱ぶりである。つまり、検定に持ち込まれた教科書の多くは man を採用しており、編集者は意見のついた箇所または全てを回避したが、検定で見過ごされた箇所または教科書は man を温存できたと分析できよう。換言すれば、文部省側の検定意見も、編集者側の回避も恣意的だということである。

教科書調査官にしても編集者にしても、結果的には性差別語と回避語の混在を放置している。このようなことばの恣意的な選択肢を教科書の中に残存させた背景には、英語圏におけることばの変化は無視できないが、「man＝人間」の男性優位のイデオロギーは死守したいと考えていることと深く関わりがあると思われるのである。

「man＝人間」のイデオロギーは、直接日本語には言語的影響を与えてはいないが、日本語人の心理には大きな影を落としていると考えられる。この man を取り巻くイデオロギーは、man を接尾語にもつ語彙のイデオロギーの原型といえるものである。

4. 対語としての -man と -person

社会における女性役割の時代的变化から、教科書の中でも女性は少しずつ積極性をもち始め、それにつれて man を接尾語にもつ語（以下、-man）も

改革される方向にある。これは女性を主体的に描く際に-manと共に表現すると、両性のイメージが反発してしまうという実際的な問題が生じて解決され始めたともいえる。それでは、この問題がどのように扱われているのかを「議長」ということばをめぐって考察することにしよう。

「議長」は chairman / chairperson / chair という変遷を辿っていることば⁽⁹⁾で、教科書では -man の中で登場する頻度と回避率が最も高い。これは、この語と共に女性が表現される例文が多いことの裏付けでもある。このうち、chairman / chairperson の使用が明確に区分されている例をそれぞれ CROWN、POWWOW、SPECTRUM の順に見てみよう。

- { They elected Millie chairperson. (彼らはミリーを議長に選んだ)
- { They elected Henry chairman. (彼らはヘンリーを議長に選んだ)
- { I am glad Maiko was elected chairperson of the newspaper club.
(麻衣子が新聞部の部長に選ばれてうれしい)
- { The members of the committee are: John Smith, chairman;...
(委員会の構成員は、議長ジョン・スミス... [筆者訳])
- { We elected Jim chairman of the student council.
(私たちはジムを生徒会長に選びました)
- { a chairperson [ことばの紹介として] (司会者)

初めの2例は、性中立語に見える chairperson も女性に限定して使われると、chairman=男、chairperson=女という新たな性区分によって、その使用が逆に性を明らかにしてしまうという限界を見事に示している。また3番目の例においては、chairman が「生徒会長」、chairperson が「司会者」という別見出しの語と解釈されるおそれがある。

結果として、chairman / chairperson ということばの二重基準が生じることになる。この二重基準が仕組まれている限り、まず学習者が chairperson を回避語として認識できるかどうか疑問であるし、また回避語として与えられたとしても、男性に対しても回避すべきことばとして認識できる可能性は

極めて低いと考えられる。

性差別語を包み隠すためのこうした -person の使用パターンは、今後も man を接尾語にもつことばが回避される度に増え続け、既に無意識に形成されている man＝男、person＝女という分類化⁽¹⁰⁾にも拍車がかかると懸念される。このようにして、英語の性差別語のイデオロギーは変形されて次世代へと再生産されてゆくのである。

教科書の中で -man を取り巻くことばが徹底して回避されていないのは、性差別語回避に関して教科書編集者が、意識的かつ積極的な姿勢をもたないことに起因している。上記 CROWN の『指導書』⁽¹¹⁾には、「本来 chairman は男女兼用の語であったが、-man に抵抗があるとの考えから、chairperson という語が生まれた」とある。ここでは chairman が「男女兼用の語」であるという一見正当な理由づけがなされ—それならば、なぜ教科書の中で、女性と chairman を使った例文が普通に見られないのか—さらに「-man に抵抗があるとの考え」をもっているのがフェミニストであることも巧妙に隠されている。つまり、chairman の伝統的な解釈は譲らないが、女性の議長も現れるという時代的な要請もあり、またフェミニストも無視できなくなったので、回避語も採用した、ということなのであろう。

性差別語改革に対する、こうした恣意的で消極的な態度は、英語圏で経験されているものと同様の変遷を辿っている。ここでも日本語人（多くは男性）は英語圏での男性優位イデオロギーの支持者（多くは白人男性）たちと同様のイデオロギーを共有、内面化していると言えそうである。

5. 「マン」の広がりとは分断される女性

英語はそのままエイゴとして日本語になるか、英語では不自然なコロケーション（語の連結）や語形変化を伴ったり、時に日本語とも組み合わせられて、新しいことばとして生み出される。この章では「マン」を例にとって、女性を表すことばと比較しながら、エイゴによって女性がどのように表現されているかを論じたいと思う。

まず、「マン」は必ず男性に対して使用されているであろうか。ことばに

敏感であれば、女性に対して「君ってスポーツマン、いや、スポーツウーマンだね」（HORIZON）との言い換えも起こり得る。だが、男としての「マン」の意味がエイゴであるために薄まったり、「フレッシュウーマン」などの言い換え語が日本語として不自然に感じられると、女性に対しても漠然と「マン」が選択される可能性が高い。事実、「女流カメラマン」という矛盾した表現も許容されている。さらに、『パーマン』や『科学忍者隊ガッチャマン』などの漫画やアニメーションのキャラクターでは、表題が示す集団に女性が含まれているのにも関わらず、「マン」で総称する傾向が強い。このようなことばの使用をみると日本語の「マン」も、「男女兼用」語として機能していることが分かるであろう。

次に、businessman をめぐる周辺のことばを眺め、「マン」が日本語に与える影響を探ってみたい。businessman（実業家）はそのまま「ビジネスマン」として日本語になっているが、実際の意味としては「サラリーマン、会社員」など、広義の男性労働者を指すことばである。英語と同様に「マン」が女性のイメージと対立してしまうため、ここで「ビジネスマン」に相当する女性労働者を指す、「ビジネス [キャリア] ウーマン」ということばが登場することになる。このことばにはある種のバイアスが働き、「ビジネスマン」の意味の広がりとは対照的に、そのイメージが、専門職に従事しているか第一線で働く女性に限定されていることは興味深い。

この「ビジネス [キャリア] ウーマン」は、社会の現状に即して次のように段階的なことばの変化を生むことになる。まず「ウーマン」が言い換えられて、「ビジネス [キャリア] レディ」、または「ビジネス [キャリア] ガール」となると、女性に対するステレオタイプの「華やかさ、上品さ、かわいらしさ」などが加わったことばになる。⁽¹²⁾ここでは英語と和製英語が入り乱れているけれども、根底にあるのは本来英語にある lady、girl のもつイデオロギーなのであり、それが日本語にそのまま移植されていることが読み取れよう。従って、女性を低く評価することばとして機能することが多い「レディ」や「ガール」が使われると、「男並み」に仕事をするという攻撃性が薄められ、社会的な「女らしさ」も加味されて、男性に媚びた表現となるの

である。加えて、「OL（オフィスレディ）」は事務職のいわゆる腰掛け的、お茶くみの存在としての一時的労働者の意味合いをもち、若い世代の女性労働者を総称することばとして定着している。

女性の労働者をめぐるエイゴが、男性に比べて細分化されていることは注目に値する。すなわち、こうしたことばの質的な差異は、「マン」は「ジェントルマン」、「ボーイ」への安易な言い換えが行われない反面、「ウーマン」は巧妙に「レディ」、「ガール」に切り換えられるという現象と連動して生じているのである。

「マン」は日本語人の意識に様々な影響を与えながら、周辺領域のことばにもそのイデオロギーを浸透させている。これは、既成の男性優位イデオロギーを解体させる力をもつ Ms（ミズ）が、「友好的に」受け入れられず、拒絶、揶揄されていることと対称を成す。⁽¹³⁾ こうして見てみると、「マン」の広がり、日本の男尊女卑的なイデオロギーを温存させるのに有効な装置のひとつであるといえよう。

英語から影響を受け、女性を表すことばが細分化されることにより、女性は自らの社会的階級を推し量る。そして女性はその中で生じる新たな差別意識によってさらに分断されるのである。ことばは「単なることば」などではなく、⁽¹⁴⁾ 政治的構造的な支配力をも有しているのである。

6. 日本語の言語改革運動につなげるために一まとめにかえて

「bitch」（淫売、あばずれ）⁽¹⁵⁾ というロゴの入った商品がここ数年、若者の間で流行している。こうした日本に輸入された英語の差別性について議論する際、「外国のものは直接関係ない」とか「差別語を指摘することが差別につながる」という言説がよく用いられる。しかしながら、無邪気に差別語を使用することが、差別語使用の許可とはならないはずである。「bitch」の国内商品化権をもつ会社側は「ジョーク的なもので、問題はない…。買う側で判断する問題」⁽¹⁶⁾ という。このコメントからは、ことばに対する鈍感さと、女性を「淫売、あばずれ」と呼ぶことは冗談の範囲を超えないとする、差別に対する根本的な意識の欠落が感じられる。

英語（エイゴ）は、商品名やロゴ、会社名、職業名（肩書き）にも安直に用いられている。それは、指し示す意味とは無関係に、英語の文字や響きが、格好よくお洒落で、時に知的好奇心やエリート意識をくすぐることを企業が心得ているからである。アイキャッチャーとしてのアルファベットや抑揚のあるキャッチフレーズにより、「英語もどき」でさえも日本の商業主義にくみすることが可能となっている。

こうしたエイゴの浸透は、ことばに対する感覚を麻痺させてしまう。例えば「ロックンロール・ウィドウ」（山口百恵のヒット曲）は「ロックンロールの未亡人?」、「ウィドウ・サポート協会」（夫を失った女性たちのグループ名）は「寡婦支援協会」の意味に相当することは意外に気づかれにくい。意味不明のことばの連なりがむしろ新鮮に感じられたり、エイゴで表記することによってことば本来の意味を薄めたりするからである⁽¹⁷⁾。また造語技術を巧みに駆使し、sexual harassment をセクシュアル・ハラスメント、セクハラ、性的嫌がらせ、という幾つもの語彙に分裂させてしまったことから分かるように、日本語人は英語本来の意味や概念を歪めていることにも頓着しない。このようにことばの使用に対して鈍感になることが、性差別語の輸入にも鈍感になるということなのである。

そうであれば、若者が先の「bitch」のような商品をその意味を知らずに買うということが起こって当然であろう。そして、無批判にことばが受け入れられ、使用され、広く認知されてゆくうちに、この英語は確実に日本語になってゆき、常に使用可能なことばの選択肢として存在し続けることになる。

特定の言語の浸透は、侵略、統治、支配を容易いものにし、現地のことばのイデオロギーをも支配するという負の側面ももっている。この自覚をもたずに、これからも英語を学び、輸入し続ける限り、日本の性差別語はさらに増えるに違いない。それはこれまで見てきたように、英語が日本語（人）に直接、間接に言語的、心理的影響を及ぼして、性差別語の問題解決を複雑で一層困難なものにしてしまうからである。

実際問題として、日常的なエイゴであれ新たに輸入される英語であれ、そ

の中の性差別語使用を簡単に阻止することはできない。それは、日本では表現者に対する暗黙の監視や制約が極めて弱いからである。人権先進国である合衆国では「政治的公正さ（Politically Correctness＝PC）」という概念がまずしっかりと据えられた。そのうえで個々の事象やことばをこのPCに照らし合わせることが可能となるのである。一方日本では、このPCも横文字であるためか、ことばだけが上滑りをしている。その議論の多くは厚みに欠け、検閲されては困るという自らを保身の側にしか置けない論調が目立つ。合衆国での問題の背景や、慎重に議論が重ねられてきた経緯にこそ目を向けるべきであるのに、極端な例を取り上げて、一面的な「ことば狩り」論に終始しているのである。これでは、合衆国に学べと声高に叫びつつ、実際には都合のよい白人男性優位のイデオロギーだけを日本の規範に即して輸入しているに過ぎないことになる。

このような脆弱な精神的土壌しかもちえない日本では、性差別語に対する認識は極めて低い。そのために、性差別語を使用するとはどういうことなのか、使用者はどのように評価されるのか、また私的使用と公的使用はどう考えるべきなのかということに対する論理的枠組みさえないに等しい。そうであれば、日本語人が望み憧れる国際的な視座からどのように評価されるのかという視点が欠落しているのも驚くべきことではないのである。

日本語の性差別語廃止の言語改革運動は、英語の攻略でもある。例えば、「スチュワーデスになりたい」⁽¹⁸⁾、「レディスものはこちらです」の差別性を認識できるかどうかという問題なのである。また英語を訳出する際に結びついてしまう、「lady＝婦人、淑女」や「housewife＝主婦」という性差別イデオロギーの融合をどう解体してゆけばよいのかという問題にも直面せざるを得ない。皮肉にも逆説的だが、こうした言語感覚を養うことができる場もやはり英語教育だといえそうである。そしてこの英語への入り口として重要な役割を果たしているのが教科書なのである。

日本語人が日頃何気なく使っているエイゴの性差別語は、学校教育の中で「正当な」英語として現在も学ばれ続けている。つまり、先の「スチュワーデス」や「レディス」が、初めから「フライトアテンダント」や「ウーマン

ズ」として導入されていたならば、この英語の性差別性は、今日のように学習されないはずであった。このように性差別語を発信し、定着させ、再生産しているのが、マスメディアとして機能している教科書である。

仮に、英語教科書が「世界に通用する国際語」を謳うのであれば、その編集では、ことばの現在はもちろん、今後起こり得る現象を察知できるような鋭い国際感覚が要求される。さらに、性差別語に対する意識の鈍磨を改善するためには、ことばというものへの妥協、甘受、承認という最も、危険で消極的な姿勢を排除しながら、自覚的によりよい表現を求める姿勢も要求されよう。今回行ったことばの調査において、回避が困難なことばをも含む性差別語を拾い上げることを原則としたのはこのためである。そうでなければ、次世代を担う学習者たちは英語と日本語の「ことば探し」の過程で、性差別語の伝える世界観があたかも普遍的であるかのような錯覚を起こしてしまうに違いないのである。

教科書が何を教えているのかを充分吟味せずに、教科書の中の差別性を二次教材として活用もできる、と単純に論点を飛躍させることは危険である。⁽¹⁹⁾ また性差別語の基準がないというのであれば、ガイドラインとしてそれを作るしかない。そしてそのとき参考にする多くは、日本語人が信奉する「外国」で発行されたものとなるであろう。⁽²⁰⁾

漠然と社会の変革を待っているだけでは、エイゴの性差別語の現状を改善することはできない。日本語（人）に大きな影響を及ぼしている、教材としての英語教科書の役割を改めて問い直し、手本としてのことばを見直すことは決して無意味なことではない。社会の現象はこうしたことばの改革があって変革され得るとも言えるからである。

註

- 1 「日本語人」とは、国籍、民族に関わらず、日本語を第一言語とする人のことを指して使用する。また、「英語人」もそれに準ずる。
- 2 以下を参照のこと。佐々木恵理「はびこる女性差別と『コクサイ人』のゆくえ」『女性学』vol. 2、日本女性学会編集委員会編、新水社、1994年。「英語教科書の『政治的公正さ』とフェミニズム」『女性学』vol. 3、日本女性学会編集委員会編、新水社、1995年。
- 3 欧州連合では公文書での共通語の問題が、また合衆国でも英語の公用語化への論争がある。中国ではインターネットの接続に関して、主に米国思想へのアクセスを管理し、世界に発信する中国語でのインターネット構想もある。ここでは、日本語人がことばについて議論することもなく、あまりにも外国語の受け入れに無頓着なことを問題にしたい。
- 4 日本語人の英語信仰（英国）はやがて米語（合衆国）信仰へと緩やかに移行し、これは教科書や辞書の変化とも大きく関わりがあると思われる。（堀口俊一他『実践英語教育体系22－日本の英語教科書のあゆみ』開隆堂、1986年）例えば、*Dream-Maker* では引用符の用い方の「方言」の例文として、“The subway is called ‘the Underground’ or ‘the Tube’ in London.” とあり、現在の英語教育が米語を主流、英語を非主流とする視点が読み取れる。
- 5 津田幸男『英語支配の構造』第三書館、1990年、pp. 47－52。ただし、津田が公平だとするエスペラント語でさえ、使用文字や形態的分類からみても、言語差別の是正に貢献するとは考えにくい。性差別の観点から言えば、この言語も男性優位的である。（D. スペンダー『ことばは男が支配する』れいのるず＝秋葉かつえ訳、勁草書房、1990年、pp. 36－37）
- 6 J.E. スタッキー『読み書き能力のイデオロギーをあばく』菊地久一訳、勁草書房、1995年。
- 7 1989年告示の『高等学校学習指導要領』に基づく現行の教科書。読み物中心の他の教科書のように、文学作品などで限定的に使用される性差別語の是非を吟味する必要性がほとんどないため、比較的正確な数量としてことばの調査が可能である。例文・構文集として、全般的にコンテキストのない文の羅列で構成されており、文字通り、文を作るという能動的な作業を通してことばをもっとも意識的に学習する教材である。
- 8 『読売新聞』1994年5月19日付。

- 9 *Oxford English Dictionary* では、chairの方がchairmanより7年早く使用され始めたことが記されている。(ロザリー・マッジオ『性差別をなくす英語表現辞典』笠井逸子訳、ジャパントタイムズ、1990年、p.55)
- 10 「人」の意味でのman(男)とperson(女)の使い分けも顕著である。The man who telephoned an hour ago was Harry. (1時間前に電話をかけてきた人はハリーです) / The person who answered the telephone was my mother. (その電話に出た人は母です) (*My English*)。またman / womanという対語に「人／女」という日本語を対応させる不均衡な使用例も多い。This is the woman whose car I borrowed last week. (こちらは、私が先週車を借りた女性です) / He's the greatest man that's ever lived. (彼は今までにいなかったような偉大な人だ) (*CREATIVE*)。
- 11 教師用の手引書のことで、編集の意図が隠されていることがある。例えば *NEW AGE* の『指導書』には、教科書には載せていない性差別語が温存されている。「mail carrier『郵便配達人』mailman, postmanとも言う。firefighter = fireman『消防士』」
- 12 「ホステス」の求人広告では、「フレッシュレディ、コンパルレディ、フロアーレディ、イメージガール」として、「レディー」「ガール」が労働内容を包み隠す働きをしている。引用文のみ、中村桃子『ことばとフェミニズム』勁草書房、1995年 (pp.101-102)。
- 13 前掲、佐々木 (1994)。大学生を対象とした「Msに関するアンケート」(1993)におけるMsの周知の割合と、Ms使用者に対する自由連想の結果を参照のこと (pp.122-126)。
- 14 英米語の影響を憂慮しているフランスでは、*Dictionnaires des Termes Officiels de la Langue Française* (1994) (『フランス語公用辞典』) が発行されたが、その中で、商品名が固有名詞化しているソニーの「Walkman」は「baladeur (散策する人)」に回避するべきことばとして位置づけられている。これはmanが「マン」となり、さらに再度英語化され、フランス語へ影響した例である。これは英語が強い支配力をもっている証左である。
- 15 I have a bitch. (雌犬を飼っている) よりも you bitch (てめえ、このスケ) や son of a bitch (淫売の息子) という女性蔑視のことばの方が「日常的」な表現である。
- 16 『朝日新聞』1996年9月10日付。
- 17 台湾出身の現代美術家シュー・リー・チェンは、東京都の現代美術展において、

米軍楚辺通信所（沖縄）をテーマにした「象のオリ、蝶のロッカー」という作品
に対して、政治的であるとの一種の「検閲」を受けた。そこで「エレファント
・ゲージ・バタフライ・ロッカー」と名称変更して出品することになった（『朝
日新聞』1996年8月22日付）。

- 18 日本航空が役職名の「スチュワーデス」を廃止したことで、国内大手三社全てが
回避語を採用することになる。『朝日新聞』8月30日付の記事（記者：石井庸雄）
では「スチュワーデスを差別語だと断じる風潮は、今のところ、日本にはない」
としている。

19 「討論・国語教科書の中の性差別を考える」『社会文学』第9号、1995年。

20 「ガイドラインの可能性」（『ずぼん』②、新泉社、1995年）を参照のこと。

(表1) 「英語ライティング」教科書の採択順位と著作者の性別比

採択 順位	発 行 者	教 科 書 名	採択 比率 (%)	著作者(人)	
				女	男
1	啓 林 館	MILESTONE English Writing	8.4	0	4
2	桐 原	SPECTRUM ENGLISH WRITING	8.1	1	3
3	三 省 堂	The CROWN English Writing	6.2	0	3
4	文 英 堂	POWWOW ENGLISH WRITING	6.2	0	6
5	開 拓	NEW ACCESS to English Writing	6.0	0	4
6	数 研	POLESTAR Writing Course	5.7	1	6
7	文 英 堂	UNICORN ENGLISH WRITING	5.2	0	7
8	東京書籍	NEW HORIZON English Writing	4.5	1	6
9	教育出版	ONE WORLD English Course Writing	3.6	0	4
10	第一学習	CREATIVE Writing Course	3.6	1	12
11	開 隆 堂	PHOENIX Writing	3.5	0	4
12	池 田	DAILY ENGLISH WRITING	3.4	0	3
13	旺 文 社	My English Composition [New Edition]	3.2	1	4
14	増 進 堂	MAINSTREAM WRITING COURSE	3.1	0	11
15	三 省 堂	Orbit English Writing	3.1	0	8
16	大 修 館	Genius ENGLISH WRITING COURSE	2.7	1	7
17	研 究 社	LIGHTHOUSE WRITING	2.6	1	8
18	一 橋	ACTIVE ENGLISH WRITING	2.4	1	7
19	尚学図書	PROGRESSIVE English Writing	2.4	2	2
20	第一学習	ENGLISH STREET Writing	2.4	0	8
21	三 友	NEW COSMOS WRITING	2.3	2	2
22	研 究 社	The New Age Writing	2.1	0	5
23	第一学習	Evergreen English Composition	1.8	0	13
24	開 拓	Write into the Future	1.6	1	2
25	東京書籍	English 21 Write on!	1.5	1	6
26	旺 文 社	Communicative English Composition	1.4	0	3
27	三 省 堂	Dream-Maker ENGLISH WRITING	1.2	1	2
28	開 隆 堂	Sunshine WRITING	1.0	1	2
29	三 友	New Atlas Writing	0.8	1	5
総 計		18社29種29点(冊)	100	17	157

*「採択順位」・「採択比率」は「96年度使用高校教科書の採択状況〈表15〉『ライティング』採択冊数等一覧」(『内外教育』時事通信社1996年1月26日)を基礎資料として作成。なお「採択冊数」は74,600～7,300の幅。

(表 2) 性差別語 (Sexist Language) および Ms 使用リスト一覧

順位と教科書名	man	総称 he	business- man	camera- man	chair- man	fire- man	fisher- man	fresh- man	mail- man	police- man
1 MILESTONE	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2 SPECTRUM	×	×	-	-	△	-	-	-	-	△
3 CROWN	×	-	×	○	△	-	-	-	×	-
4 POWWOW	-	-	×	○	△	-	-	-	-	-
5 NEW ACCESS	-	-	-	×	○	-	-	-	-	○
6 POLESTAR	×	-	×	×	○	-	-	-	-	○
7 UNICORN	-	-	-	○	×	-	-	-	-	-
8 NEW HORIZON	-	×	×	○	○	○	-	-	○	○
9 ONE WORLD	×	×	-	-	-	-	-	-	-	×
10 CREATIVE	×	-	×	-	-	-	-	-	-	×
11 PHOENIX	×	×	-	-	○	-	-	×	-	-
12 DAILY	×	×	-	○	×	-	-	-	×	-
13 My English	×	-	×	○	×	-	-	×	-	-
14 MAINSTREAM	-	-	-	-	○	-	×	-	-	-
15 Orbit	×	-	-	-	○	-	-	×	-	-
16 Genius	×	-	-	○	○	-	-	×	-	-
17 LIGHTHOUSE	×	×	-	-	○	-	×	-	-	×
18 ACTIVE	-	-	-	-	-	-	-	×	-	-
19 PROGRESSIVE	-	-	-	○	○	○	-	-	-	○
20 ENGLISH STREET	-	-	-	○	-	-	-	-	×	○
21 NEW COSMOS	×	-	-	-	○	-	×	-	×	×
22 New Age	×	×	-	-	○	○	-	-	○	×
23 Evergreen	-	-	-	-	-	-	-	-	×	×
24 Write into	×	×	×	×	-	-	-	-	○	△
25 Write on!	-	-	-	-	○	○	-	-	○	-
26 Communicative	×	×	-	-	○	-	-	-	-	-
27 Dream-Maker	-	-	-	○	-	-	-	-	○	-
28 Sunshine	×	-	-	-	-	-	×	×	○	○
29 New Atlas	×	-	×	○	○	○	-	-	×	×

記号および表の説明

× … 性差別語がそのまま使用されているもの

○ … 性差別語が他の言葉によって回避されているもの

△ … 性差別語が回避されていたり回避されていなかったりして、表記が不統一なもの

◎ … その言葉が使用されているもの

- … その言葉が使用されていないもの

*cameraman … 回避語を photographer とする

*salesman … 回避語を salesperson, salesclerk とする

*sportsman … 回避語を「スポーツ万能の」という意味で用いた athlete とする

	sales- man	sports- man	states- man	weather- man	国名 +man	house- wife	stewardess	lady	gentle- man	Ms: 文中 / 手紙
1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	- / -
2	-	x	-	x	-	-	○	-	-	- / ◎
3	x	-	-	-	○	-	○	x	x	- / -
4	○	-	-	-	○	x	-	x	x	◎ / -
5	○	-	-	-	-	-	○	x	x	◎ / -
6	-	-	x	-	-	x	○	x	-	- / -
7	○	-	-	-	x	-	-	-	-	◎ / -
8	-	○	-	○	○	-	-	x	-	◎ / ◎
9	-	-	-	-	x	-	-	-	-	◎ / -
10	-	-	-	-	○	-	-	x	-	- / -
11	-	-	-	-	-	-	-	x	-	◎ / -
12	-	○	x	-	-	x	-	x	-	- / -
13	-	-	x	-	-	x	-	x	-	- / -
14	-	-	x	-	-	-	-	-	-	◎ / ◎
15	-	○	-	-	-	-	-	x	x	◎ / ◎
16	○	-	x	○	-	-	-	x	x	◎ / ◎
17	-	△	-	-	-	x	-	-	-	◎ / -
18	-	-	-	x	-	-	-	x	-	- / ◎
19	○	-	-	-	-	○	○	-	-	◎ / ◎
20	○	-	-	-	-	-	-	-	x	- / ◎
21	○	-	-	-	x	-	-	x	-	- / -
22	x	-	-	x	x	-	-	x	x	- / -
23	○	-	-	-	○	-	-	-	x	- / -
24	○	○	-	-	-	-	-	-	x	◎ / ◎
25	○	-	-	-	-	○	○	-	-	◎ / ◎
26	-	-	-	-	-	-	-	-	x	- / -
27	○	-	-	-	-	-	-	x	-	- / ◎
28	○	x	-	-	-	x	○	x	-	◎ / ◎
29	-	-	-	-	-	-	-	x	-	◎ / ◎

*その他の性差別語（数字は採用した教科書の数）

mother tongue(8), clergyman, spaceman, s[S]uperman, sister city (以上、2),
Batman, craftsman, doorman, feminine, linesman, lowerclassman, maestro, master,
Miss Flower [Personality], newsboy, night watchman, penmanship, Queen of karaoke,
serviceman, upperclassman, walkman, widow, workman, yachtswoman, Japan-her (以上、1)

*性別で表記が分けられている語（全体から抽出）

actor / actress, Congressman / Congresswoman, Dietman / Dietwoman, fiancé / fiancée,
guy / girl, hero / heroine, host / hostess, men's / ladies', waiter / waitress